

アメリカ研修報告

日本ライトハウス職業・生活訓練センター

荒川輝男

はじめに

昨年、アメリカにおける盲重複障害者の状況や訓練を研修する機会を得た。

期間は7月14日から9月31日までの2ヶ月半であった。

アメリカで感じたことは当然のことだが、日本とは違うということである。

たとえば、施設にしても日本の感覚で捉えれば、日本にある他の施設の情報をたちどころに得ることができるが、アメリカではせいぜい同じ州内の情報を得ているくらいが限度で、興味がない人だったら州内さえもよく知らない職員が多く存在していた。視覚のみの単一障害であればまだ情報は多いが、アメリカにおける、知恵遅れを併せ持つ盲重複障害者の施設での研修の調整を日本にいながらにして図ることは非常に難しいものであった。

盲重複障害者の教育、訓練に関しては、学校が必要に応じて21才まで延長して保障され、その中で職業訓練も取り入れて卒業すれば家庭や宿泊施設、グループホームなどから仕事の場であるワークショップへ通うというのが基本的なパターンであり、学校卒業後に訓練という考え方はほとんど無いということであった。また、アメリカでは盲重複障害者の意味として用いられるのは、ほとんど盲ろう者のことであり、ヘレンケラーの成功に培われた実績が、盲ろう教育の充実に反映していることを感じさせられた。

(1) 視覚障害者の実態について

視覚障害者の実態については、資料だけの範囲であるが、日本の障害の程度とかなり違うので同じ基準として判断することはできない。

次の表は、National Center for Health Statistics (NCHS) (1986) のアメリカにおける視覚障害者の統計資料である(表1)。表の補足として人口1,000人に対する視覚障害者の数が掲げられており、全視覚障害者は40人(4パーセント)、重度視覚障害者は10人(1パーセント)となっている。日本に比べると異常な高率で(日本の視覚障害者の出現率は約0.4パーセント)

セント)、障害の基準がかなり緩く設けられていることがわかる。確かに盲学校などを見学したときに殆ど障害を感じさせない生徒が多く見受けられた。この統計から興味深い点を見いだすと、重度視覚障害者の方で65才以上

の老人の占める割合が77パーセントと非常な高率を示していること、低年齢になるほど少なくなっていることであり、これらは日本の状況と良く似ているといえる。

障害の範囲が広いということから、特に弱視者に対する対策が整っているという感じを受けた。とにかく一般の書店をのぞいても少し大きめの店であれば必ずといっていいほど拡大図書(Large·Print)のコーナーがあり、ニューヨークとフィラデルフィアの公共の図書館では、日本では信じられないぐらいの膨大な量の拡大図書が置かれていた。拡大図書だけで書店が開けるぐらいであった。

(2) 障害者雇用について

視覚障害者の就業の実態は、今回のテーマとしては考えていなかったし、具体的な資料や情報は得なかつたので詳しくはわからないが、視覚障害者の就業率は約20パーセントだと聞いた。表1の実態から考えると低すぎるという印象を受ける。また、盲ろうの重複障害者がコンピュータプログラマーとして政府機関などへ就職しているという話である。

私がむしろ驚いたのは、食事をするためにファーストフードの店によく行ったのだが、そこで働く精神発達遅滞のことである。マクドナルド、バーガーキングなど大手の殆どの店で雇用されており、主な業務は、片手に洗剤、もう片方にペーパータオルを持ち、客が食べた後のテーブル拭く係がほとんどで

表 1

年 齢	全ての視覚障害者		重度視覚障害者	
	数	パーセンテージ	数	パーセンテージ
18以下	770,000	9	88,100	2
18~44	2,896,000	35	186,200	7
45~64	2,071,000	25	269,700	14
65~74	1,177,000	14	883,000	19
75以上	1,438,000	17	1,158,000	58
合 計	8,352,000	100	1,980,400	100

あったが、日本では考えられない光景であった。

(3) 統合教育について

今回の研修に際して、何故アメリカに盲学校が存在するのかということが一つの疑問であった。全障害児教育法の施行以来、障害児は全て普通校へという理解をしていたので、基本的には盲学校の存在価値がないのだろうと思っていた。

この疑問を解決すべくいろいろなところでこのことを質問してみたが、フィラデルフィアにある A S B (アソシエーティッド・サービスーズ・フォー・ザ・ブラインド) でトランジットプログラム (このプログラムは統合教育を受けている弱視の高校生を対象として毎年夏休みに視覚障害に関する専門的な訓練とコンピュータなどの職業教育を 8 週間かけて行うもの) というのを開催しており、そこのプログラムディレクターの話が全てを物語っていると思われた。その話によると、それぞれの州に巡回教師がいて普通校に在籍している生徒に対して教育を行うが、巡回教師の絶対数が不足しており (ちなみにペンシルバニア州で 13 名) 、専門的な教育がなかなか受けられないというのが一番の理由であった。パーキンス盲学校のケイファー・パークシュ氏も同じような理由を述べていた。

アメリカにおいても統合教育は必ずしもバラ色ではないのである。その結果として盲学校が存在しているというのが実情である。就業に関しても一般の高校生は長期の休みになるとほとんどがアルバイトをするが、視覚に障害を持つ生徒は弱視であっても雇用されず、こうした形でのプログラムに 8 年間通って、普通学校と比較して足りない面を補っていかざるを得ないということであった。ボストンにあるキャロルセンターでも全盲者も含めて同じようなプログラムを行っていた。

(4) A D A (障害をもつアメリカ国民法) の話題

日本では画期的な法律で大変な話題を提供している。ちょうど私が在米しているときにこの法律は成立したわけだが、ほとんどこの話題を耳にすることがなくておどろいてしまった。

現実には、雇用問題をとってみても障害があることで雇用の差別があっては

ならないとされているが、一方では業務が遂行できなければ雇用しなくてもよいというような条文もあり、関係者は割とさめた感じをもっているというのが私の印象であった。あるところで聞いた話によると、雑多な人種で構成されているアメリカ社会は、禁煙の法律でも同じような意味合いがあって、先に法律を作つて枠組を決めてからでないと物事がなかなか動かないという一面があるということであった。

また、今回の法律で成立に関して一番抵抗が強かったのが公共の交通機関などである。それは、設備改善に関して非常に大きな負担がかかるためであるが、現実に見た光景としては、バスに車椅子の障害者が乗ろうとした時、運転手はバスを一旦止め、昇降口へ行って昇降の階段（3段）を油圧装置でフラットにして地面までおろし、車椅子を乗せる。バスに乗り込むと座席をたたんで車椅子を固定する。その間4～5分、乗客はじっと待っている。降りる時はこの逆の繰り返しである。別な場面では老人がバスに乗り込もうとする時、バスの車体そのものが下へ下がって乗車しやすいようになっていた。他の乗客はごく当然のこととしてこの光景を待っているのである。このようにハードとソフトの両面からの対策がすでに成されていることには感心した。

(5) アメリカ社会と視覚障害者

とにかくアメリカの情報をほとんど持たずにいって驚くことが非常に多かった。盲学校や施設では女性の管理職がほとんどで女性の役割が大きな位置を占めている場面が多く見られた。一般の企業でも近い将来、女性の重役が半数以上を占めるようになるであろうということである。働く女性が多いという理由からか、家事は簡素化されているという印象を受けた。家には必ず全自動洗濯機、乾燥機、食器洗い機が備えられている。当然、視覚障害者のリハビリテーションに占める日常生活動作訓練も日本に比べればその負担が少なくなってくる。しかし、家が広いために掃除機も大型にできており（縦型で吸い込み口が80cm幅ぐらいで大きくなっている）、視覚障害者が使いこなしていくには難しいものも見られた。

また、何回か障害者が家から弁当を持ってきて食べている様子を見る機会があった。ほとんどがトーストにハムを挟んで食べるだけで、少しましなのにな

ると野菜とフルーツを持ってきている。飲み物はほとんどがコーラで、日本人の感覚からすれば何とも寂しいものであった。

視覚障害者の移動に関しては、戸外は非常に楽である。日本では歩道を占拠している自転車、看板、店の商品などの障害物がまず見られない。裏を返せば自転車を放置しておけばすぐ無くなってしまうのである。道路には必ず名称が付いており、自分の位置と目的地の位置が容易に判断できる。場所によっては幅1mくらいの歩道が芝生に挟まれているため、この歩道から出なければいいのである。

屋内では逆に移動が困難である。専門の施設や学校であっても視覚障害者が動きやすく考えて物を配置するということは殆どないように感じられた。単独で動けるようにするというよりも、とにかく回りが手を貸せばいいという考え方なのだろう。屋外での大ざっぱな動きのままで部屋の中を動くのであちこちとぶつかりながら移動する場面が多く見られた。日本の視覚障害者の方が劣悪な歩行環境に慣れているだけ移動能力は高いと思われた。

在米中に不思議に思ったことの一つに、障害児・者が長時間待たされている場面が多かったことがある。ADA法に代表されるように民主主義の盛んなアメリカ社会では訴訟や要求運動が日常茶飯事であり、そのような印象を持ってアメリカ社会というものを見ていたので、悪く言えば障害者がほって置かれた状態で何も問題が生じないのかなと思った。日本の障害者だったらもっと文句が出てくるだろうと思う場面が多かった。

上記のような場面と比べて障害者（児）の写真撮影やビデオの撮影に関しては非常に厳しく、例えば学校で現場の教師に授業場面の写真撮影の許可を求めるとかならずスーパーバイザー（日本で言えば学部主任）に許可を求めるように指示をされる。スーパーバイザーに許可を求めるとき児童のリストを見て、親が撮影を許可しているかどうかを確認する。結果として、ほとんどの場合が断られるのである。人権の保障が厳しいアメリカ社会においては、もっともなことだとは思うが、何となく矛盾が見られるような場面も多く感じられた。

以下、施設研修・見学（18ヶ所）について述べるが、アメリカの7～8月は

夏休みであり、研修する時期としては非常にタイミングが悪いので、研修先をさがすのに四苦八苦した。また、こちらの意図を十分に伝えないと、中途半端な要求ではなかなか動いてくれない国民性を感じた。しかし、こちらの意図を十分理解してくれるときっちりと段取りを決めてくれるのでいろんな人々に助けられた。なかには自宅に泊めてくれたり、食事を御馳走してくれたりと見知らぬ土地で随分と勇気づけられた。

研修はそれぞれの宿舎に泊めてもらい、障害者や生徒と生活を共にして一日の生活の流れを見ながらと思っていたが、昼間の訓練や授業を見学して何故、夜まで必要なのかというところを理解してもらうことができず、前半は宿舎に泊めてもらうということができなかった。なぜならば教師や指導員も学校の教師と宿舎の教師の分担がきっちりと決められ、その人が関わっている以外の部分では何をやっているのか知らないという人が多かったからである。こういう面はアメリカ人の合理的な考え方なのだろう。研修先の内訳は AFB、盲学校 2 校、リハビリテーションセンター 3ヶ所、ワークショップ 1ヶ所、精神発達遅滞児・者訓練所 1ヶ所、キャンプ場 1ヶ所、点字出版所 1ヶ所、複合（盲学校・ワークショップなど）2ヶ所、グループホーム 1ヶ所（9ヶ所）である。

1. アメリカン・ファンデーション・フォー・ザ・ブラインド

（ A F B : American Foundation for the Blind ）

ニューヨークのマンハッタンの中心部から少し離れたところに位置しており、入口は狭くて小さな建物の印象があるが、中に入ると複雑になっていて 3 つのビルを合わせて使用し、12 階もの高さがあるということだった。日本で言えば日盲社協にあたるような組織であろう。スタッフは約 800 名で主な業務としては、視覚障害に関する啓発的な出版物（例えば盲児、盲児の指導に関するもの、統合教育に関するもの、リハビリテーション関係、糖尿病に関するものなど）の発行、雇用、リハビリテーション、盲老人など全般にわたる研究や取り組み、視覚障害者のための機器開発、指導や訓練に関する資料の貸し出し、テープ図書の発行などである。

ここ 6 階にはヘレン・ケラーの遺品を展示してある特別室と執務していた

部屋がある。現在はチーフディレクターのウイリアム・ギャラガー氏が使っておられる。ヘレン・ケラーの遺品の中には松尾芭蕉の人形のほか、数々の勲章や自筆の手紙などが展示されていた。

機器開発の部門では5人のスタッフがおり、機器を音声に変換するものが主流で紙幣弁別器（ドル紙幣は全部サイズが同じ）、糖尿病者のための血糖値検査器、血圧計、はかりなどを見せてもらった。テープ図書は、全て4トラックのテープレコーダー専用の図書を製作していた。

ライブラリーは、点字図書館ではなく、普通文字の図書をおいており、各地の視覚障害に関する資料や外国の資料が約37,000冊も揃っている。3日間ほど通っていろいろな資料を閲覧させてもらうことができた。ちなみに外国からでも資料を請求すればコピーでのサービスが可能だということであった。もともと、私の研修はこのリハビリテーション・老人・雇用部長のジェラルド・ミラー氏にアメリカの施設の紹介をしてもらってスタートしたわけだが、日本と違ってアメリカで研修をするならば、自分自身の目的をはっきりと意思表示して詳細な手続きを依頼しないとなかなか動いてくれないということを痛感させられた。

2. ジュエイッシュ・ギルド・フォー・ザ・ブラインド

(Jewish Guild for the Blind)

ニューヨーク市民の憩いの場であるセントラルパークのすぐ西側に面しており、日本の感覚で見ると見当違いのする大きな10階建のビルディングである。A F B のミラー氏が緊急に見学依頼をしてくれて行ったが、すでに夏休みに入ってしまって訓練や授業は行ていなかった。ここは、視覚障害に関する医療的なケア、盲学校と盲重複障害者の収容施設、テープライブラリー、視覚障害者向けのラジオ放送などをやっている。全館とも壁がカラフルに塗り分けてあり非常にきれいな印象を受けた。

3. ヘレン・ケラー・ナショナル・センター

(Helen Keller National Center) (写真1)

ニューヨークから電車で約40分のポートワシントンという田舎の町でニューヨークの喧騒からすると信じられないぐらいの静かなたたずまいである。駅からタクシーで5分ほどである。ここは視覚と聴覚に障害を持つ盲ろう者の訓練を行うリハビリテーション施設である。敷地内は建物が2つあり、1つは管理・訓練棟、もう1つが宿舎となっていて木々と芝生に囲まれのんびりとしていた。この施設は私が訪れた各地でパーキンス盲学校と並んでかなり高い評価を受けていた。

見学はアシスタントディレクターのアリソン・バロー女史が案内してくれ、なんとか1泊させてもらって訓練や寄宿舎の生活の様子を見学をした。訓練生は22名おり、精神発達遅滞を合わせ持つ3重障害者、車椅子の人、盲ろうというよりもろうあ者かと思うような人まで様々であった。

訓練内容は日常生活動作訓練、コミュニケーション訓練、作業訓練、コンピュータを使った訓練などをやっていた。興味深かったのは訓練室の床全体が振動盤になっていて指導者がマイクで話したり、音楽をならすと振動して伝達するという装置があった。作業訓練では簡単な組立ての作業サンプルを与えられてそれを模倣して組み立てる。別な場面では封筒の宛名貼りなどがやられていた。日常生活動作訓練では特に目立ったものは感じなかった。

宿舎の方は残念乍ら個室を覗くことができなかつたので、よくわからなかつた。食事は好きなメニューを自分で選べるシステムになっており内容は非常に良かった。夜の自由時間には、ほとんどがフロアに集まっての団らんであったが、かなり固執的な傾向の訓練生が数人がいて、スタッフとしかコミュニケーションが取れていなかつたが、同じことの繰り返しながらもスタッフが充分時間をかけて指文字で対応している様子は非常に印象深かつた。

ディレクターはバレット氏で彼自身が盲ろう者であり、発音はかなり聞き取りにくかつたが、彼によると、盲ろう者の就労ではコンピュータのプログラマーとして政府機関に雇用されている人も多いということであった。たまたま、話の中で日本から盲ろうの福島智さんが見学に訪れたという話を聞いた。彼を中心に盲ろう者の組織化がスタートしたばかりの日本と比べてアメリカの盲ろう者にかける施策の充実さに驚かされた次第である。

4. アソシエーティッド・サービスーズ・フォー・ブラインド

(Associated Services for the Blind)

フィラデルフィア市内の中心部に位置している。都市部の施設であるので縁のある空間はないが10階建のビルを5階まで使って業務を行っている。主な業務は、リハビリテーション、機器の販売、盲老人のサロン、雇用促進部門、前記したトランジットプログラムなどである。

まず、盲老人のサロンの見学をした。参加者は10名、地区の視覚障害者が主であるが、なかには2時間もかけて来ている人もいた。先天視覚障害者とおもわれる人が2人、5~6人はよく見えていた。スタッフが2名、ボランティアが2名である。内容は熊などの形を切り抜いたものを台紙に貼り付け、切り抜いた部分に絵の具を皿に出し筆で塗り付ける。何故このようなあまり楽しくないとおもわれることを見えない人達が喜々としてやっているのか理解できなかった。ほとんどはボランティアが中心になって教えて、スタッフは援助するだけであった。皿に絵の具を塗りつけるときだけは色のでている場所を時計の文字盤に置き替えて指示しているのが何となく救いのように思ったが、色を塗布した感じなど対象者がどれだけの充実感があるのかと疑わしかった。

別な場所では、トランジットプログラムをやっていて州内の弱視の高校生を対象にしている。この日は6名の高校生が出席していて、訓練は帳簿の計算をシャープの音声電卓を使って行うというものであった。他にタイプの練習、パソコンゲーム、クッキー作り、歩行訓練などをしていた。訓練の場面は、非常に和やかで自由な雰囲気があったが、締まりのなさを感じた。

プログラムディレクターのマーラ・ザザーランド女史に統合教育などについていろいろと話を聞いた。詳細は前記してあるので省くが、予算は州政府から出ており、定員は11名である。しかし、毎年、対象者を集めるのに苦労し、また、せっかく集めても続かず1~2日で来なくなるケースもあるということであった。

5. パーキンス盲学校 (Perkins School for the Blind)

ヘレン・ケラーで世界的に有名な学校である。是非とも長期滞在をして研修さ

せてもらいたいと考えて日本から研修依頼をしていたが、夏休みにはいる7・8月は時期が悪すぎるという理由であまり芳しい回答はもらっていないかった。

直接の窓口は、ティーチャートレーニングプログラムのスーパーバイザー、ケイファー・バークシュ氏で、渡米してからA.F.BのG.ミラー氏に頼んでスケジュールを作って欲しい旨を伝えてもらい、7月23日～25日と27日の4日間、見学した。しかし、26日から夏休みにはいるので授業の見学は2日間だけであった。半日は同じ敷地内にあるハウプレス(Howe Press Factory)の見学と後はバークシュ氏の紹介でボストン市内にあるキャロルセンター、ナショナルブレイルプレス、マサチューセッツ・アソシエーション・フォー・ザ・ブラインドの3カ所を見学した。

ボストン市はすごくきれいで落ちついた町であったが、それよりも、さらに落ちついた感じをかもしだしているのがこのパーキンス盲学校で、広大な敷地の中の中心にそびえているハウビルディング(初代の校長ハウ博士: Dr. Howe を記念して作られている)を囲むように各校舎が建ち、学校というよりも何かの記念館という感じであった。敷地内は森のような木々と全面芝生が植えられ通行する部分だけ舗装がしてあった。

ここは、ヘレン・ケラーの教育が有名であるが、ヘレン・ケラーの成功以前に、初代校長のハウ博士が盲ろうあのローラ・ブリッジマン(Laura Bridgman)の教育に成果があって、それがヘレン・ケラーの教育につながっているということであった。

プログラムの内容は大きくは次の5つにわけられている。生徒の全員が何らかの重複した障害を持っている。

① プリスクール・サービス(Preschool Services)

日本でいうところの幼稚部にあたるもので次の2つのコースに分けられている。

(イ) ザ・インファン童・タドラー(The Infant-Toddler Program : 乳児から3才まで)

(ア) ザ・プリスクール(The Preschool Program : 3才から6才まで)

② ロワースクール・プログラム(Lower School Program : Primary)

and Intermediate Program)

視覚障害との重複した他の障害を持つ小学生を対象としている。

③ セカンダリ・サービス(Secondary Services)

視覚障害との重複した他の障害を持つ中学生から高校生を対象としている。

④ デフブラインド・プログラム(Deaf-Blind Program)

盲ろうの重複した障害を持つ生徒を対象にして、3つのコースがある。

(ア) 幼、小学生のプログラム**(イ) 小学生高学年から中学生的プログラム****(ウ) 高校生からヤングアダルツのプログラム****⑤ アダルツ・サービス(Adult Services)**

マルチハンディキャップや脳損傷を持つ高校過程を卒業した対象で生活技能や職業技能を身につけさせる。

⑥ シビアリー・インペアード・プログラム(Severely Impaired Program)

重度の障害者に24時間体制で生活技能や言葉や社会的活動を行い、様々な刺激を与える。

このほかにティーチャー・トレーニング・プログラムなどもある。

このプログラムの中からいくつか見学をしたのでその様子を報告する。

(1) ロワースクールの見学(写真2、3)

小学校に当る対象である。授業時間は8時25分から30分刻みで、5分間の休憩をはさみ、午前中に7限がある。さらに昼休み(昼食)をはさんで8時になると10時限の授業で非常に忙しかった。30分の授業時間というものがどんな意味を持つのか良く理解できなかったが、何らかの根拠があっての時間設定だと思う。しかし、休憩時間に教室の移動が入ってくると実質的な時間は25分程度になってしまうという場面もみられた。

1時限目…プログラムの説明

2時限目(クラフト)

8人(全盲)の生徒に2人の教師で授業。2人の生徒は絵本を作っているという。まず1人の生徒と教師が本人と話を進めながら物語を組み立て、教師が画用紙に文章を書く。情景が決まると教師の指示で布切れをハサミで切り、画

用紙に貼り付ける。また、ボンドをぬらせ、その上に色のついた砂を落とさせて出来上がる。この間15分。もう1人（無言語）はこの間じっと椅子に座り、最後の5分ぐらい相手をしてもらう。

もう1人は情緒的に不安定な生徒で椅子に座ることが嫌で、座らせるためにもう1人の教師が躍起になっていた。ようやく、座って型はめパズル（日本でもよく見られる立方体のボックス）を喜んでやっていた。授業が終わると今度は次の教室への移動を嫌がり、床に寝転がって抵抗するので教師の対応を注意深くみまもっていたが、かなり待ってはいたものの最後は無理やりにおこしてしまった。

3時限目（ミュージック）

生徒4人に教師が2人。この時間はさすがに皆喜んでやっていた。ロンドンブリッジともう1曲を教師のギター演奏に合わせて生徒は打楽器中心でやっていた。水道管のエンビのパイプに細工をした手作りの楽器が面白い音を出していた。

4時限目（体育施設見学）

大小2つの体育館があり、大きいほうには各コーナーにスピーカーを埋め込み、音楽を流して角がわかり易いようになっていた。中ではローラースケートをやっていた。2階は壁沿いに橿円のコースが作られ、4つのコーナーが傾斜していて単独での散歩やランニングができるように配慮されていた。他に温水プール、トレーニング機器がたくさん並べられていたが、実際に使用している場面は見れなかった。

5時限目（コーヒーブレイク）

校庭にて12才の2人の男女生徒とブランコに乗り話しをする。2人とも軽度の遅れをもっている生徒だったが、彼等との会話はほとんど通じなかった。

6時限目（クッキング）

4人の生徒に教師が2人。構内の売店から買物をしてきて昼食用の食事とケーキを作っていた。能力的には高い生徒であったが、全くと言っていいほど自主的に考えてやらせる場面がなく、ほとんどを教師が段取りしてほんの少しの部分で生徒を参加させるだけであった。見学していく面白さを感じなかった。

昼食

40人ぐらいが7つのテーブルに分かれ、それぞれのクラスごとに教師がついて食べていた。食べ方はひどいものであった。食器は皿がメインになるので、ものがこぼれないように皿にガードをつけて食べやすく工夫してあった。

7時限目（感覚訓練）

訓練場面ではほとんどが感覚統合訓練用の機器が多く、スピンなどいろいろと工夫された椅子などもあった。また、感触の違うブラシが置いてあって皮膚感覚への刺激も取り入れているということであった。

8時限目（7才児のクラス）

生徒3人に教師が1人。生徒の1人は弱視で文字を読む練習をやっており、同じ文字の弁別や大小を見分けることもやっていた。1人は左手が不自由な子で玉入れをしており、教師が不自由な左手をつかわそうとしていたがなかなか使わなかった。もう1人は4ヶ月前に入学したばかりとのことであったが、まだ座位の姿勢保持ができず、テーブル付きの椅子に座って手で取っ手を引っ張ると簡単な日常会話が出るおもちゃで遊んでいた。この3人の生徒に教師が1人では大変そうであった。

9・10時限目（ワークショップ）

この時間は1時間を単位として10種類ぐらいの作業サンプルの中からいろいろなものを取りだして1人の教師が3人の生徒にやらせていた。

パーキンス盲学校を見学して、障害に対する考え方や、自立の概念、文化、思想等が日本とは違うため同じ物差しで見ることはできないとは思うが、教える場面で工夫が足りないし、適当にやっているという印象をもった。生徒は能力は十分ありそうなのにトイレにいくでも補助の教師が手引きして連れていく、糊付けやクッキングでマヨネーズを塗るときは生徒の手をつかわせるでもなく一生懸命にsqueeze（絞り出す）と言うだけで確認させるわけでもないというように、教師が視覚障害をどのように理解しているのかと思う場面が多かった。

教材にしても見えていなければ理解に難しいような材料や場面が目につき、一つの関連ある動作の中でも生徒がやらせてもらえる場面はほんの一握りであった。教師の働きかけは、「ベリイ・グッド」、「グッド」、「ナイス・ショ

ブ」、「グッド・ジョブ」、「グッド・ワーク」などの声掛けが中心である。

(2) デフ・ブラインド・プログラム

中心部のハウビルディングから80メートルぐらい離れて校門の近くにデフ・ブラインド専用の校舎が建っている。こちらはモダンな煉瓦作りの校舎である。ここではプログラムが3つに分かれている。幼、小学生のプログラム、小学校高学年から中学生までのプログラム、高校から21才までのヤングアダルツのプログラムである。カリキュラムは日常生活技能、職業前訓練、教養学習の3つの柱に加えて自立生活するためのトレーニングを重点にやっているとのことであった。

幼、小学生のプログラムについて、スーパーバイザーのシャロン・ステルザー女史の説明を受けた。ブラインドと言ってもほとんどが弱視で、ろう教育そのままという感じがする。まさにコミュニケーション手段の確立（文字の獲得、フィンガーサインなど）に重点が置かれ、教室の中はそれぞれのプログラム（1日の）を決めるカード入れが作られ（例えばスイミングの時間だったら水泳をしている絵カードを選ぶ）、壁に掛けてある時間割りにマジックテープで貼り付けていく。基本的なカリキュラムは教師が決め、その範囲の中で生徒自身が選ぶシステムを取っている。文字が書ける生徒は文字を書き入れたりもしている。また、ろうであってもその程度は分からないが、聴力が十分使えるものもあるし、聞こえにくい場合は必ず首掛け式の補聴器を下げている。興味深かったのはサマープログラムの中で、4人の7～8才ぐらゐの生徒にプレイ場面でくすぐったり、毛布にくるんだり、遊具で刺激を与えたりと感覚刺激を割と使ってやっていたことである。聞いてみると我々が実施しているほどは皮膚感覚への刺激はやっていないということであった。

アダルツの部門は夏休み前でほとんど授業をやっていなかったり、実習で出掛けたりで授業場面は見ることができず、スーパーバイザーのスザン・シャンパー女史に話を聞いただけであった。この部門では職業前訓練に重点を置いており、ボストン市内にグリーンハウスを持ち、そこへ実習に行ったり、自動販売機の管理実習、レストランでの実習などを行っている。また、ここにレジデンスに住んで同じ敷地内にあるハウプレスで働いているもの（5人）も

いた。

デフブラインドに関しては数々の実績があり、コミュニケーション手段の確立を目指して色々な方法を取り入れている場面が見られた。しかし、言葉に関しては、音声による表出言語が可能な感じを受ける生徒に対して発声をさせて言葉につなげていくというよりも安易に指文字や身振りサインに転化させていく場面が多いのではないかという印象を受けた。

6. キャロルセンター (Caroll Center)

ここはボストン市の中心部から車で約20分程度西に移動したところにあり、車で15分以内にパーキンス盲学校、ボストン大学がある。建物は緑に囲まれた煉瓦作りのものが3棟（管理・訓練棟、宿舎、コンピュータ訓練棟）あり、割と小じんまりとした印象を受けた。事業の主なものとしてはリハビリテーションと視覚障害者の機器販売である。

管理・訓練棟（3階建で地下を入れて4階）では、ロービジョン訓練室、コミュニケーション訓練室、インディペンデント・デイリィーリビング（日常生活動作）訓練室などを見学した。この建物は馬小屋を改造して作ったもので1階の各部屋の前には馬の名札がかかっていてその名残を残していた。寄宿舎は1部屋に3人ずつが寄宿しており、1人ずつにベッドと部屋ごとにシャワー室とキッチンが備えてあった。

私が訪問したときは夏休みで、高校生を中心としたサマースクール（トランジットプログラム）を行っていた。対象者はASBと一緒にいるが、全盲生も含まれ、コンピュータの訓練とコミュニケーション、弱視者に対して単眼鏡を使った歩行訓練などが実施されていた。

7. ナショナル・ブレイル・プレス (National Braille Press)

パーキンス盲学校のパークシュ氏の紹介でボストン市内の中心部にある点字出版所を見学した。ディレクターはウイリアム・レイダー氏で、まさにひと昔前の海賊の風情という感じ、全盲で右目に眼帯、右手が義手（引っ掛けることができる鉄の爪）、左手は薬指と小指だけといういでたちであった。人がよく陽

気な人で、忙しいさなか出版所の中を案内してもらった。ここでは40人が働いており、視覚障害者は8名いるとのことであった。

事業は主に児童書、雑誌、コンピュータのマニュアルなどを中心に製作していた。とにかく売れる図書を作らないといけないということで、いろいろな分野に積極的に取り組んでいるとのことであった。機械では亜鉛板への自動打ち込みが1枚につき35秒、スミ字図書の自動読み取り機械が1ページを約2分、印刷は自動印刷機械でやっており、1人で担当していた。全盲者は印刷した雑誌を揃えたり、ホッチキス止め（機械）の仕事を行っていた。

他の学校や施設でも感じたが、このディレクター等視覚障害者に案内してもらうと、館内の理解はしているようだが、移動能力があまり高くなく、あちこちにぶつかるのである。こちらもどれだけ援助していいか、わからないのでそのままにしていたが、もう少しスマートに移動できないものかと思わせられた。

8. マサチューセッツ・アソシエーション・フォー・ザ・ブラインド

(Massachusetts Association for the Blind)

パーキンス盲学校のパークシュ氏の紹介で訪問した。ボストンの中心部から車で5分ぐらいの閑静な住宅地の真ん中にあり、非常にきれいな環境の中に位置している。この施設は、機器の販売、視覚障害者向けのラジオ放送局、盲重複障害児のための訓練プログラム（学校）、ワークショップ（精神発達遅滞者）などを主な業務としている。学校部門とワークショップを3日間見学した。

学校部門は寄宿形態で行っており、生徒が約20人である。すぐ近くにパーキンス盲学校があって、何故この施設があるのか、また、パーキンス盲学校には極端に重度と感じる生徒が少なかったことの2つが疑問であった。しかし、ここへ来て最重度の生徒に出会い、少し疑問が解けたような気がした。ほとんどの生徒が無言語で身辺処理ができない。4つのクラスがあり、1クラスが5人ずつの生徒に3人の教師がついている。授業の内容は課題学習が全てで、1つの課題ができると卓上に置いてあるベルを鳴らし、終わったという身振りサインをだす。その後、机の上に8つの丸が書いてある台紙があり、教師から1セ

ントコインをもらって並べていく。丸が全部コインで埋まると報酬として好きなスナック菓子がもらえるのである。

型はめ、形の弁別、紐通し、ペグボードなど教材はふんだんに取り揃えてある。教師の声掛けは常に「グッド・ジョブ」である。しかし、課題が与えられっぱなしという場面も見られ、また、嫌でも課題をさせられている場面が多くあり、必ずしも「グッド・ジョブ」が楽しいものではないような感じを受けた。

このクラスは5人とも無言語であったが、疑問としては（パーキンスでも感じたが）音声によるコミュニケーション手段をどこまで重視しているのか、ただ容易に身振りサインや指文字を導入しているのではないかが残った。最重度のクラスは学習というよりもまるで子守をしているような感じを受けた。また、教師はコーラを飲みながら授業をやっており、教師に対する評価はどのようになっているのかと思った。

9. ホール・マーサー (Hall Mercer : ペンシルバニア病院)

フィラデルフィア市内の中心部にあり、一般の総合病院の一部に精神発達遅滞者の通所の訓練部門と障害乳幼児の訪問指導部門とを持っていた。もともと紹介を受けた時点では視覚障害で精神発達遅滞を伴っているときいていたのであったが、残念ながら視覚障害関係ではなかった。都合3日間ほど訓練を見学した。

(1) 精神発達遅滞者の訓練

アメリカの場合、21才になって学校を卒業すると、ワークショップがたくさんあるため何らかの形で利用する場合が多いのだが、珍しいと感じたのはここでは訓練を主体としていることである。

訓練内容は数の概念やお金の計算や管理、身辺処理（歯みがき、整髪、靴の掃除、マニキュアの付け方等）、簡単な調理、調理に必要な知識などの訓練と作業（アメリカでよくやられている授産課目として病院のパンフレット作成がある。というのはアメリカは国民健康保険制度がないので経営上、病院が独自に援助者や患者に対し、様々な報告書などを定期的に作成してそれを送る。大きな病院になると膨大な量になり、それをワークショップで受けて仕事をし

ているのである)が組まれていた。ここでは同じ組織の病院からのパンフレットを作業課目として何枚かのパンフレット、報告書などをひとまとめにして封筒に入れ、封筒の宛名張りなどを行っていた。

(2) 障害乳幼児の訓練

ここではパトリシア・グッドという女性が担当しており、インファン・マッサージをやっているというので2日間訪れたが、結果的に対象児が病気で休んだため、直接訓練を見ることはできなかった。訓練は、障害をもった幼児に対して母親が拒否的になり、母子ともに情緒的な問題を抱えている場合が多いため、母親が子供にマッサージ(インファン・マッサージ)をすることで両者が心身ともにリラックスできることを主眼においているということであった。

ここで聞いた話はアメリカにおける子育てについてである。アメリカにおいては子供の自立心という面を大事にするので幼児期から母子分離ということが強調される。現実的に街で出会う親子の場面を見て日本とは少し違うなという印象をもっていた。また、印象に残ったのは、爪噛みをする若い男女が非常に多いということであった。何故そうなのかという質問をしてみると1900年代の初めに2人の偉い小児科医が子供の自立心ということを強調したため、その主張がずっと受け継がれてきているということであった。しかし、最近になりスキンシップの重要性がうたわれ、育児が少しづつ変化してきているということであった。

10. A R C / レインボー(写真4)

(The Association for Retarded Citizens : A R C / Rainbow)

フィラデルフィア市の南部に位置し、市の中心部から約20分地下鉄、市バスを乗りついで約10分ぐらいで着く。周辺は黒人居住地区となっており、市内で黒人に出会うと何となく尻込みしてしまうが、不思議なもので周囲が黒人ばかりになってしまうと逆に違和感も感じなくなる。

この施設は、精神発達遅滞者の通所のワークショップで約200人のクライエントに直接の現場の指導員が約15名いる。ワークショップの規模は大きく、工場内だけで幅が約35m長さが100m近くもあり、中で運動会ができるような広

さである。クライエントは、6つくらいのグループに分けられている。仕事の内容は、単純なもので以下のようなものが主で障害の程度に合わせて作業を決めている。

- ① ヌードルのカップを12個ずつ重ねて袋詰め
- ② 15cmぐらいの大きな釘をトタンで作った筒の中にいれ、10本ずつを袋詰め
- ③ L字型のフックの材料を袋詰め
- ④ プラスチックの型抜き
- ⑤ 鋼鉄の細長い薄い板（約1.5m）を丸めて袋詰め

軽度のグループの指導員は殆どが作業状況の管理とクライエントの成績を一生懸命チェックしており（多分これが給料の査定になると思うが）、特に指導しながらという雰囲気はなかった。

クライエントは自宅、グループホーム、他の施設等から通ってきており、何名かに聞いてみたところグループホームが多かった。重度者のグループを除けば、ほとんどが中程度以上の能力（何とか言葉か身振りでのコミュニケーションが可能）と思われるが、うろうろと殆ど仕事をせずに動き回っているものも多かった。重度のグループは作業可能な人が半分ぐらいいるが、それにも指導員がつきっきりで指示しなければだめである。ヌードルのカップを12個重ねるだけなのだが、テーブルの上のダンボールに○印を12個、読めるものには○印の中に数字を書き、とにかく満たしたらひとまとめにするという方式で、指導員が目を離すと、手が全く止まってしまうか、減らやたらと重ねてしまうという場面がみられた。

指導場面と言えるのはほとんど見られず、仕事のやり方が画一的な感じを受けた。数は数えることができないけれども目は見えるからという理由からか、とにかく一定の数を袋にいれる場合、殆ど全て紙にその数だけ絵を書いてテーブルの上に置き、それを満たせばいいということで、個人の能力に合わせて仕事と学習を折り込みながらという配慮は感じられなかった。視覚障害者は2人だけで最重度のクラスで仕事らしき場面はなかった。

11. バケイション・キャンプ・フォー・ザ・ブラインド

(Vacation Camp for the Blind)

ニューヨーク市よりバスで1時間30分ほど北へ移動した場所にある視覚障害者専用の宿泊施設である（AFBのミラー氏の紹介）。何故、視覚障害者専用なのかはたずねなかった。ちなみにアメリカにおいては各州に1～2ヶ所の専用のキャンプ場をもっているとのことであった。キャンプ場といつてもいわゆるテントを張るキャンプ場ではなくて、バンガローを備えており、利用者はニューヨーク市などから2週間交替で利用するのである。運営は州の補助と殆どが寄付によってまかなっているとのことであった。利用できるのは6月から9月までと、春と秋の週末だけということであった。利用に際しては無料でニューヨークからの送迎のバスを出してくれる。

施設面は広大な敷地に大小あわせて30棟ぐらいの建物、ダイニングルーム、それに続く広間には約200人がゆったり座って食事ができるスペースがある。宿泊棟は老人用、重複障害者用、家族用などにわかれており、他にプール、小さな図書館、体育館、工房、ボートなどを備えている。利用は短期間のため敷地内の移動は道路の横に水道管をつないだ手摺りにより自分で行えるようになっている。環境といい建物の設備といい、非常に羨ましいかぎりではあるが、何故かどこもかしこも非常に汚れていた。

スタッフは、スーパーバイザーと呼ばれる職員が10名、施設長は50才位の全盲の女性であった。中には看護婦が1名含まれている。他に36名ほどの中、高生、大学生、一般のボランティアが組織されており、カウンセラーと呼ばれていた。このカウンセラーが、食事を作るグループ、食卓で世話をするグループ、移動場面や部屋で世話をするグループなどに分けられ、きっちりと業務分担が成されて、自分に与えられた仕事を一生懸命やっていた。個人的にはアメリカの若い世代に対して変な偏見をもっていたが、殆どのボランティアが2～3ヶ月間泊まり込みで活動しているとのことであった。

私が行ったときは、ボストン市とニューヨーク市から約185人ほどが訪れており、約3分の2が重複障害者、残りの半分が盲老人、残りが一般の視覚障害者と家族という割合であった。特に重複障害者に関してはかなりの重度者やてんかんを併せ持っている人もたくさん含まれており、以外に平気

で受け入れているところは楽観的というか、日本では考えられないという気がした。日中の活動は、カウンセラーが中心となってクラフト、プール、自転車（タンデム）エアロビクス、ボーリング、室内ゲーム（主にビンゴ）などのプログラム、夕食後はゲーム大会やコンサート、歌合戦などが組まれ利用者を飽きさせないように配慮されていた。

このようなキャンプ場が日本にも必要であろう。ただし、具体的な処遇面を見るとボランティアのカウンセラーは全くの素人であり、とにかく利用者がいつまでも待たされる場面や対応のまづさがよく目についた。利用者も全く根気強いのか、慣らされてしまっているのか、特に、帰る際にバスが来てから全員が乗りこんでしまうまでに1時間30分もかかったのは、日本では考えられないことであると驚いてしまった。

また、ボランティアの仕事が分担されているのは先に述べたが、後片付けのときに、私が暇だったのでシーツを片付けたり、床を掃いたり、拭いたりしていると中学生や高校生のボランティアがきて、何故やっているんだと抗議をしてくる。暇だからやっていると答えると、それは後片付けや掃除の担当がやるからやってはいけないんだということを盛んに言う。本人は好意でやっているのだけれどもその好意は、他の人の仕事を取り上げていることになるという論理である。アメリカ社会がかかえる難しい問題の一端をかいまみた気がした。

12. ケン・クレスト・サービスズ (Ken Crest Services)

この組織はフィラデルフィア市内から車で西北へ約40分ほど移動したプリマウス・ミーティングという場所に本部を置いている。プログラムの内容は以下の表に示す通りである（表2）。この表の(1)のチルドレンズ・サービスは障害を持つ幼児の訓練であるが、このプログラムは見学する機会がなかった。また、(2)のレジデンシャル・サービスはグループホームのことでフィラデルフィア地区の15のホームのうち1つのホームに10日間宿泊させてもらって8ヶ所を見て回った。(3)のポケーションナル・プログラムはワークショップのことで1ヶ所見学した。

ここではレジデンシャル・サービスについて報告する。組織の流れは表3の

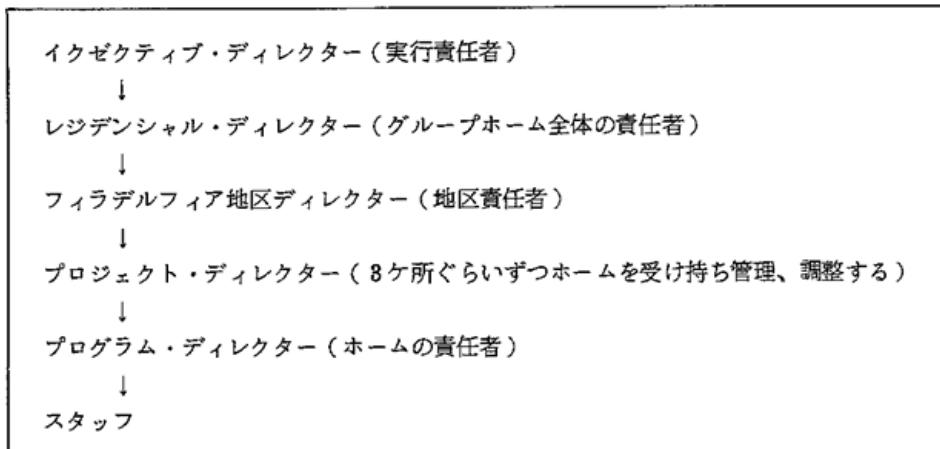
ようになっている。直接の処遇場面では、プロジェクトディレクターが管理をしてホームの責任者の

表 2

プログラムディレクターと打合せをしながら運営していくという方法を取っている。この組織を紹介してくれたプロジェクトディレクターのエリカ・シュルクスキーという女性は、全米一のグループホームの組織だと胸をはつていた。

プロ グ ラ ム	クライエント	ス タ ッ フ	場 所
(1) チルドレンズ サービス	748	154	13
(2) レジデンシャル サービス	235	324	61
A. コミュニティ リビング アレンジメント	146	182	47
1) ファミリイ リビング	9	2	8
2) フィラデルフィア	46	76	15
3) モンゴメリイ カウンティ	49	52	18
4) ステイツ オブ デラウエアー	42	52	16
B. リバー クレスト	89	142	14
(3) ボケーション プログラム	158	49	3
(4) キャンプ ケン クレスト	241	38	1
合 計	1,877	565	78

表 3



見学したホームはほとんどが同じ規模で3～5人、スタッフは5～7人であった。入居者は身体障害者と精神発達遅滞者がおり、私が訪問したホームは視覚障害者だけが生活しているところが2ヶ所、全体で7名の視覚に障害を持つ人達が入居していた。介護に関しては、ほとんど必要無い人から全面介護を要する人まで様々であったが、全体的には重度の人達が多く、地域の中で生活しているのは驚きであった。入居者は昼間は全員がワークショップへ働きにでか

ける。もちろんスタッフの送迎である。

建物は2戸で1つになっており、敷地、建物とも日本の感覚で言えば広く、ゆったりとしていた。ホームの形態は都市部の一般的な住宅だと思うが、3階建、そして地下がある。個人のプライベートな部屋は必ず用意され、大体10畳から6畳ぐらいのスペースである。利用のための費用は多くはSSI(サブルメンタル・セキュリティ・インカム)と呼ばれる年金(月に\$418.4)などから月に\$301.25を支払っているとのことであった。

あるホームを紹介すると入居者は男性3人(32、42、48才、最重度の障害者で日常身辺処理は全介助を要する。1人がてんかんを持っている)スタッフは7人、驚くべき手厚さである。想像以上にきれいに掃除されて床に座っても問題ないぐらいにきれいであった。個室はベッドでそれぞれの家具も備えてある。ちょうど訪問したときは朝でシャワーを使っていた。3人のうち1人は素っ裸で寝、他の2人は汚れたパンツをはき、1人は部屋中におう吐していた。シャワーでは全面介護(ひげそり、洗髪、身体洗い、服の着脱)でスタッフは一生懸命介護していた。食事は、基本的には手作りのものを食べさせるということで、非常に内容の濃いものであった。スタッフは7人が交替で勤務にあたり、医療面のケアは定期的に看護婦が巡回して様子を見ていた。

ケン・クレストの組織の規模は大きい、ノーマライゼイションの考えに基づいたグループホームは素晴らしい、運営面においても羨ましい部分が多くあった。気になったのは、本部の管理部門ではほとんどが白人のスタッフで黒人は1人しかいなかったのに対して、各ホームの現場のスタッフは黒人と南米からの移住者がほとんどであったことである。他の学校や施設においても管理部門と現場の状況は同じような場面が多く、アメリカの抱えている問題がまだまだこのような形で残されているのだろうと思った。

私が訪問したホームでは、ほとんどのスタッフが勤務してから1年以内で4年もいれば随分と古いほうであった。日本と違ってある程度の意識を持ってこの仕事につくというよりも、次の転職までの一時的な収入を得る場所としての認識しか持っていない場合が多く、仕事をやる内容にも大きな差がみられた。現場のスタッフの話を聞くと給料の安さを嘆いている者が多かった。勤務して

から2週間しかたっていないスタッフ2人で宿直をし、重度の障害者をケアしている様子を見ると不安を感じる部分もあった。管理部門では就業期間の短さには特に問題は感じているようではなかった。

13. オーバーブルック盲学校 (Overbrook School for the Blind)

この学校は、フィラデルフィア市内の中心から西の方角へ車だと約20分、地下鉄、バスを乗り次いで行くと約40分ぐらいのところにあり、白人と他の人種の中間地帯といったところに位置している。歴史的には、アメリカの盲学校では2番目に古い私立学校とのことであった。1833年に全盲のドイツ人によって設立され、2回の引っ越しの後、1899年に現在地へ移転してきたとのことであった。ここもパーキンス盲学校と同様に木々と芝生に囲まれた伝統のある校舎である。敷地はパーキンス盲学校に比べると少し狭いような感じである。0才から21才まで児童、学生を対象としている。アメリカにおいては一応、教育の対象年齢は18才までであるが、21才までの3年間は必要であれば保障されているようで、いいシステムである。

ここへは8月の最初に見学で訪れ、インターナショナルプログラムのディレクター、アンケ・リムロット女史に出会い、その後のスケジュールも定かでなかったため、親日家でもある彼女に必死で頼みこんで宿舎に空きがあればという条件で、後日改めて連絡を取ってようやくOKをもらった次第である。そして、彼女の好意で9月の10日から28日までインターナショナルの寄宿舎に宿泊させてもらい、各プログラムを見学させてもらった。

教育プログラムの内容は以下のようである。

- ① アーリー・インターベンション・プログラム
(Early Intervention Program)
盲幼児の訪問指導で、2才7ヶ月以上の幼児を対象
- ② アーリー・チャイルドフード・プログラム
(Early Childhood Program)
盲幼児訓練で、2才から7才までを対象
- ③ セカンドアリィ・プログラム (Secondary Program)

普通の教科指導を行う小学校から高等学校までを対象

- ④ コンセントレイション・オン・プラクティカル・エドケーション・プログラム
(Concentration on Practical Education Program: COPE Program)
セカンダリイ・プログラムの対象で、将来、独立して自活できるように生活
や職業の教育中心
- ⑤ ラーニング・イン・ファンクショナル・エンバイロメンツ・プログラム：
ライフ・プログラム
(Learning in Functional Environments Program: LIFE Program)
ライフプログラムと呼ばれ、盲重複障害児の教育で6才から21才までを対象
- ⑥ インターナショナル・プログラム (International Program)
世界各国の盲学生を集め、英語での授業とコンピューターの技術の養成
このプログラムの中から⑤、⑥と歩行訓練の状況を報告する。

(1) ラーニング・イン・ファンクショナル・エンバイロメンツ・プログラム
：ライフ・プログラム

キャンパスの中にネビルセンター (Nevil Center) といってライフプログラム用の校舎があり、重複障害児童を一括し、基準はよくわからなかったが、縦割りにして35名の生徒を1クラス4～6名にわけ、クラスティーチャーが1人、アシスタントが2人ずつで編成されていた。ちなみに教師は11名、アシスタントが13名、PT 1人、ST 1人、音楽の専門が1人となっていた。アシスタントは年配の女性や黒人の女性で、指導の権限はなく、移動やクラスティーチャーがいないときに安全を確保したり、指導場面での補助をするようであった。

どの教室も部屋の広さはたっぷりとあり（約8m四方の教室と6畳位の大きさのプレイルーム）、流し台、食事用のテーブル、他にオモチャ、手作りの教材などがたくさん置いてある。授業時間は1時限45分間で、午前中4時限、午後が2時限である。

1時限 (6才児のクラス)

生徒が4名（1名休み）、クラスティーチャーはミーティングで不在、アシスタントがプレイルームで遊ばせている。遊ばせているといっても遊べ遊べと

言っているだけで、ほとんど手は出さずに見ているだけである。たまたま生徒が大声を出すと叫ばないように注意していた。クラスティーチャーが来てからの授業は、ラジカセの音楽に合わせて月日、曜日、名前、身体各部の名称、左右の弁別、身体運動などをおり込み、歌ったり踊ったりして生徒は喜んでやっていた。

2時限（7～8才児のクラス）

ここでは4人の生徒に弱視者と60才ぐらいの2人のアシスタントがついていた。クラスティーチャーは不在で、ちょうど、おやつの時間に当っていた。シンシアという女の子がいて片マヒ、言葉は喃語段階でアーアという発音が多くなったが、意思表示は充分できるし指示に対する理解力もある。よだれ、口への自己刺激と現在は音声言語への発達段階だと思うが、彼女がいろんな意思表示をしても、アシスタントはほとんど反応は返していなかった。これでは彼女も言葉の発達が遅いだろうと思った。

3時限（8～13才児のクラス）

生徒5人に、アシスタント2人、クラスティーチャーは遅れてくる。このクラスでは身体各部の理解を中心としたサイモンセイズというゲームをやっていった。

4時限（デフブラインドのクラス）

19才と20才の3人のデフブラインドの生徒にフィンガーサインによる授業で1人はサインの理解、1人は計算の練習をしていた。3人とも視覚はかなりあるので、手話による授業であった。

5時限（13～20才のクラス）

生徒6人にクラスティーチャー1人、アシスタント2人である。最初は1ページの話を読んで、途中にいろいろな質問をして内容の理解ができているかを見ていた。次に数の計算、ひと桁の足し算がほとんどであった。その後、点字カードを読ませいろいろな質問をする。とにかくメニューがころころと変わるので生徒がどこまで集中できるのか疑問であった。1人の生徒は、重度のCPのようであったが、固定式の椅子に座り、ヘッドホンでカセットを聞いて喜んでいた。

6 時限（体育）

2クラス合同の授業、体育館はパーキンスと同じような周回用のコースが作られて生徒11名、クラスティーチャー3人とアシスタントで、まず周回コースをどんどんと歩かされていた。途中、嫌がる生徒も無理やり歩かされて座り込んでしまう場面も見られたが、怒られながら歩かされていた。こんな場面で動機付けにもう少し工夫が無いのだろうかと思った。その後、ジャンプや手足を動かす体操、ボール送りなどをやっていた。なかには一生懸命やっている教師もいるが、とにかくダラダラとした感じで生徒を歩かせながら教師は座ってペチャクチャと話をしていたりとしまりがなかった。

(2) インターナショナル・プログラム

日本においてもマスコミを通じて有名な学校だったので馴染みはあった。インターナショナル・プログラムは、アンケ・リムロット女史が英語圏以外の国々の盲学生に対して英語を理解させること、さらに、視覚障害者にとって点字の世界で晴眼者と対等にやっていくのは難しいため、そのハンディが少ないコンピュータの知識・技術を身につけて職業にすすませることの2つを大きな目的としてスタートしてから5年目を迎えたところである。全体として、ようやく体制が整いつつあるかなという段階で、プログラムそのものが完成するまでにはもうしばらく時間がかかりそうである。

ちなみに日本の学生は2年目から参加しており、日本ライトハウスではその卒業生を2人ほど受け入れている。コースは2つあり、スチューデントコース（高校生から24~5才までを対象としている）とティーチャーズコース（指導者の養成）である。スチューデントコースは83名の学生がおり、内訳は、韓国1、マレーシア2、タイ2、ネパール1、フィリピン2、アルゼンチン1、ドイツ6、ポーランド3、フィンランド1、オランダ1、ハンガリー3、イスラエル1、ブルガリア2、日本6となっている。ティーチャーズコースは韓国、ネパール、ハンガリー、ブルガリア、ソ連の国々から7名という状況であった。

スタッフも国際的でタイ、中国、ドイツ、ポーランド、日本などからの講師が揃っていた。授業内容は英会話、アメリカ歴史、コンピュータに関する講義、実習、音楽、運動の時間などがある。英語会話の能力により4つのクラスに分

けられ、会話能力の低いクラスほど英語にかける時間が多くなっている。ちなみに日本人学生は、コンピュータに関しては他国の生徒に比べて最高の知識をもっているが、英語能力に関しては下位のクラスを占めていた。特色としては、今年から日本語の重要性が打ち出され、外国語として日本語を採用して日本人以外の生徒に義務付けていたことである。ヨーロッパ諸国的学生には、かなり反発をもっている者もいたがアジア諸国的学生は真剣に受け止めていたのが印象的であった。

各国の学生や教師にそれぞれの国における視覚障害者の就業の実態や状況を聞いてみたが、日本と同程度に感じられたのはドイツ、イスラエルぐらいであり、視覚障害者の置かれている状況が非常に厳しいという実感を受けた。東欧諸国に関しては以前の政治体制で作られていた国営工場やワークショップなどへの就労は多いという話であったが、コンピュータなどの業務に従事しているケースは殆どないようであった。このコースで指導者を養成していることも重要な意味を含んでいるということが実感された次第であるが、それぞれの国情を聞くと自国へ帰ってから開拓していくことが非常に困難であることを訴えるものもいた。

日本人学生に関しては、2つの目的のうちコンピュータについては、日本語という文字の問題が非常に大きく、また、コンピュータの知識を身につけ、それを就業に結び付けようとすれば、あえてアメリカで勉強するということのメリットは少ないと思われた。しかし、言葉、習慣、文化の違うアメリカで1年間を過ごすということの面をみると大いに視野を広める場面としては非常に有意義であるし、世界各国の学生との交流ができるということは素晴らしいことだと思われた。なお、このプログラムは日本で言えば専修学校のようなもので日本の高校の単位にプラスされるというメリットではなく、留学すれば1年間は完全に休学となる。リムロット女史の構想では、将来は何らかの形で資格が取れるように目指していくとのことであった。

(3) 歩行訓練

学校全体で4人の歩行訓練士がいる。彼等は歩行訓練専任であり、1人の女性は19年間も歩行訓練士をやっているとのことであった。日本の盲学校では本来



写真1 ヘレン・ケラーナショナルセンター



写真2 パーキンス盲学校教室



写真3 パーキンス盲学校教室



写真4 ARC／レインボー作業室

の教科指導があり、歩行訓練の時間がなかなかとれないという話を聞くが、学校のシステムの中で歩行訓練士の位置付けがきっちりとなされているのは素晴らしいことである。

見学をした19才の女生徒のは交差点の発見、横断（信号を含む）の訓練をやっていた。歩道の幅が3mぐらいあり、その中間の1.5m位がコンクリート、両側は芝生になっていて、真っ直進む際に注意するのは、ドライブウェイ（車の進入路）と家の入口だけでよほどのことがないかぎり、歩道上で間違うことはないと思われた。後は交差点に注意を集中できるので日本に比べると非常に楽な歩行環境である。2人めの生徒は16才の男生徒で方角等の基礎的能力の低い生徒であった。学校の周囲を回る訓練で、地図そのものは頭の中では理解しているようだが、行動になると曲がったり、Uターンしてもわからず、車道側の車音の利用もできていなかった。その結果、同じところをうろうろして時間を浪費してしまっていた。

訓練が終わってから、日本の歩行訓練について、電車に乗車する際に何故後ろ向きで歩いて乗るのか（アメリカでは車掌が車両の真ん中当たりで乗車を確認する）、交差点の横断の際、何故白杖を振らないのか（日本の学生を見て間違った認識をしている）、信号機は同じシステムか、日本では道路に名称がついていないのは何故かというような質問を受けた。

おわりに

内容的に、少し辛らつな表現が多くなってしまったが、アメリカの素晴らしい面はいろんな面で感じた。特に制度面に関しては、日本ではともすれば縦割り行政のはざまで身体障害と精神発達遅滞が分けられてしまうが、アメリカでは一括して措置しており、さらに、行政の主体が州に置かれているため、細かなケア体制が作られているように思えた。表4はニューヨーク州とペンシルバニア州における福祉サービス機関を示したものである。この表を見ると、きめ細かなサービス体系がわかる。リハビリテーション施設は大規模なものではなく、小さい規模の施設があちこちにあり利用しやすくなっている。また、興味を引いたのは、ラジオによるインフォーメーションサービスである。聴取者は、少

ない局では数百人規模からやっており、採算はどうなっているのか心配になるくらいである。ロービジョンセンターも日本では考えられないくらいの数の施設が揃っており羨ましいかぎりである。

このように制度やサービス面に関しては、日本は学ぶべき点が多く感じられた。しかし、現場レベルでいろんな面を見てみると日本の盲学校や施設で行われている教育や訓練が必ずしも劣っているという訳ではなく、むしろ

日本の方が一生懸命やっているのではないかということが率直な感想であった。

表4 ニューヨーク州とペンシルバニア州における福祉サービス機関

サービスの種類	ニューヨーク	ペンシルバニア
州 サービス	1	
教育 サービス(教師の養成、援助など)		1
盲 学 校	3	4
幼児/就学前指導機関	4	4
インストラクショナル マテリアル サービス	19	20
プロフェッショナル プリベレーション プログラム	5	3
インフォーメーションサービス ラジオ リーディング	450~30,500人 5局 260~5,000人	9局 375~4,000人
点字・テープ印刷	1	
ライブラリとインフォーメーション センター	39	6
リハビリテーションサービス 州 民 間	1 26	39
コンピュータトレーニングセンター	1	3
盲 導 犬	2	
ロービジョン センター	17	12